

エル・パイプ紙

“私は踊りをやる日本人ではなく、ただ単にバイラオーラでありたいです”

田村陽子はスペイン人アーティストを招き、舞台“ミラーダス”を日本各地で上演する。

記事：アントニオ・パラ ラ・ウニオン 2015年11月24日

[写真]

今年度カンテ・デ・ラス・ミナス・フェスティバル（ムルシア州）のセミファイナルにて。
バイラオーラ（フラメンコ舞踊手）田村陽子。

若い頃のある日、田村陽子は将来何になりたいか具体的且つ確信的に分かった。それはフラメンコ舞踊手である。現在30代の彼女は幼い頃より日本の伝統舞踊やクラシック・バレエ、そして後にジャズダンスと言った踊りを習ってきた。

しかし突然、テレビでフラメンコを題材とする映画を見た時、“太陽の子”を意味する名を持つこのアーティストは真の光、輝きを浴びた。彼女の行く道はフラメンコだと決まった。しかし、その為には舞踊手になる事を賛成してくれない母親を説得しなければならなかった。

これは日本で行われた第一回カンテ・デ・ラス・ミナス舞踊部門でエル・デスプランテ賞に輝き、フラメンコ・コンクールのメッカであるラ・ウニオンの由緒あるコンクール本選への切符を獲得し、極東の地からスペインの極東であるラ・ウニオン(ムルシア州)へ、かの有名なフラメンコ・フェスティバルへ出場する旅ルポである。彼女にとっては神話的な旅。

フラメンコはみんなのもの、世界的なものです。だからこそユネスコは世界文化遺産に指定したのです。

1年の内の数カ月はスペイン、主にセビージャで過ごす田村は、最近までエストレマドゥーラ州にある舞踊手・振付家ヘスス・オルテガ主宰のフラメンコ・ダンス・センターで取り組んでいた作品を一カ月に渡り日本各地の劇場での上演を開始。後にスペインでも上演される。この舞台は日本人、スペイン人アーティストで構成され、ピアニストのリカルド・ミーニョもその内の一人。彼は田村のシギリージャをソロで伴奏する。又、ガルシア・ロルカがラ・アルヘンティニータの為にアレンジした名曲、エル・ソロンゴをも復活させ、ミラーダスと名付け振付した。

何十年も前から日本ではカンテ・ホンドが好まれ、その劇場やタブラオ、同好会は多くのスペイン人フラメンコアーティストの希望の地となった。彼らは本国では不景気で満杯となり、競争率が激化した市場の出口をここで見つけている。しかし、ここ数年、日本人フラメンコアーティスト、特に女性舞踊手が多いが中にはギタリストや歌手も誕生している。

エキゾチック以上のもの

初めの頃は、アンダルシア州のどこかのフラメンコ・コンクールに出場して、決して上位には進めなく、エキゾチックなエピソードとして取り上げられていたが、それは変わりつつある。心が伴っていない機械技術の模範者としてのレッテルを貼られていたが、今では時には感情、そしてドゥエンデ(フラメンコの持つ不思議な魔力)までも移入するのだと認められている。その点では、田村ははっきりと宣言する“私は一人の日本人ではなく、バイラオーラである”

田村はセミファイナルに進むことが出来ず、ラ・ウニオンで優勝は逃した。しかしコンパスに忠実で真面目、優雅で感情に溢れたその踊りは観客に強い印象を与え、情熱のこもった拍手がおくられた。コンクールは厳しいものだった。数日の間、会場となったラ・ウニオンの古い市場にはスペイン全土から最も実力のある若い舞踊手たちが集まった。最終的に最優秀賞に輝いたのは20歳のグラナダ出身のアルバ・エレディアだった。かの有名なマヤー族の一員である。

“優勝しようとは思っていなかった、賞はここに居る事、毎年最も素晴らしいアーティストが立つこの舞台に自分も立つ事でした”と田村は語る。観客は彼女を褒めたたえ、どれ程素晴らしい踊りだったか伝える為に会場の周辺に集まった。田村は上手なスペイン語で感謝する。側にはスペイン滞在期間中色々アドバイスし、案内してくれるフラメンコ専門記者のマリア・イサベル・ロドリゲス・パロップ、そして暖かく見守ってくれるスペインの偉大なマエストラ、クリスティナ・オヨスが居る。クリスティナ・オヨスは忘れがたいアントニオ・ガデスのカルメンであり、今は亡き舞踊手の数多くの作品の中でパートナーを務めた。

田村はフラメンコに専念して20年になるが、初めてフラメンコの力強さに圧倒されたのが昨日のようだと話す。10年間、日本のフラメンコ舞踊の婦人、小松原庸子の舞踊団で活躍した。小松原はスペインでも公演を行い、10年前この同じラ・ウニオンの舞台上で公演を行っている。クリスティナ・オヨスとは日本で行われたマルワ財団のコンクールの審査員として来日された際に知り合い、後にセビージャのお宅に招かれたと言う。フェスティバル期間中、宿泊しているカルタヘナのホテルのホールで田村はリハーサルを行い、クリスティナ・オヨスは注意深くそれを見て、細かい点を指導する。“すごいリズム感の持ち主だと思わない？”と私に聞く - それは肯定しているに等しい -。

ガルシア・パロップは断言する：“フラメンコの真髄を自分のものにして来た事は見事だと思う。彼女が属する千年紀文化は民族の融合と保護であり、独特の感情表現を持つフラメンコと直接結びついた”。しかし、エストレマドゥーラ州出身の記者は国内の審査員や批評家、専門家の認識の度合いに疑問を抱いている。その点、田村のラ・ウニオン出場、そして優勝しなかった事に対し“我々のフラメンコの守護神の死の扉を開くようで恐怖心からなのか、それとも十分な実力が認められなかったのか、私にはその疑問が残る”。又“努力と技術でドゥエンデにも到達出来る事は確かである”と力説する。

● お腹の底で踊る

不思議なことに、田村は舞台に上がる直前、それほど緊張している様子はない。その間、オヨスは衣裳を直し、髪型をチェック、立ち止まり、田村を見て最終的な指示を与える。これからラ・ユニオンの課題曲であるタラントを踊る、ファルーカと同様、田村の好きな曲目の一つである。“気持ちを込めて踊らなければならない曲なので好きです、自分の中に秘めた感情を出していきたいです” そんなに下手ではないようだ “なぜならクリスティナが感情を表現する方法を教えてくれたから”。

セビージャ出身のオヨスはその言葉を批准する “私は情熱を表現する事をお教えた、お腹の底で踊らなければならない、観客に自分が踊っている時の感情が届かなければ意味がないといつも言っているの。彼女はとても努力家だから期待しているの。” 彼女と一緒にある意味、前代未聞のこの旅のお供するヘスス・オルテガも又その内なる強さを確証する “フラメンコで技術は大切だけど、彼女の感情を伝える才能もまた重要です”。

そして田村自身 “フラメンコはみんなのもの、世界的なものです。だからユネスコが世界文化遺産に指定したのです。私は踊りをやる日本人ではなく、ただ単にバイラオーラでありたいです” とまとめた。